
白鳥色の飴玉

暮菱葛葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白鳥色の飴玉

【Zマーク】

Z7006P

【作者名】

暮菱葛葉

【あらすじ】

学園祭とハロウィーンと日常の謎。

シリーズ第二作目。

前作読んでなくても大丈夫です。

活動誌『然』 7号より。

(前書き)

やつと投稿できました。
もうクリスマスですね。

前作よりも少し強めです。

「昨日の敵は今日の友」という言葉があるように、人という生き物は常に変化し続けるものであり、また、外部との接觸を日に日に変えるもので、そう考えると全人類例外なくシンデレであると言えなくもない気がしてくる。ただ、逆もまた然りというもので、昨日の友は今日の敵であることも少なからずあるわけだ。

総じて。

ささしそうすずかぜ
笠代涼風は僕のことが嫌いらしい。

秋の寒さが身に沁みてくる十月の終わり。僕、暮菱葛葉は最近そ
うしているように、一人で登校してきた。

九月から急に冷え込んできた。衣替えがあつたため一応の寒さは
しのげているが、手や顔にあたる風は結構きつい。

この調子だと、十一月半ばには雪が降り始めるかもしれない。

風。

風、ね。

そして、凍える要素がもう一つ。

隣に、クラスメイトであり僕の一番の親友である笠代涼風が、い
ない。

寒いな、まつたくもつ。

まあ、非があるのは僕なのだから、今更こんなことを言つのはた
だのわがままでしかないのだけど。

一週間くらい前までは、一緒に通学していた。

春、夏と続けて涼風に大迷惑をかけてしまったことで、なんとな

く話しづらくなってしまった、だんだん会話が減つていって、とうとつこの前喧嘩してしまった。

それから、僕は雪比等さんと話すことが多くなってしまったから、雪比等さんが嫌いな涼風としては、僕に話しかけづらいのだろう。以上、考察。

もう何回田になるだらうか、ぐるぐると彷徨ひ思考をとつやめて教室に着く。

がらりと教室前方の引き戸を開けると、まず机に突つ伏して寝てこる涼風の姿が目に入る。

どことなく、やつれているようだつた。元々色白だから、尚更そう見えるのかもしれない。

やつぱり、仲直りしたほうがいいんだよな。

ふと、涼風がこっちを向いたことに気付いた。

じろじろ見すぎたのかもしれない。僕は急に恥ずかしくなつて、田をそらした。

いそいそと自分の席に座つて、一息つく。

「暮菱さん」

隣の席の委員長が話しかけてくる。

長い黒髪に、優等生然とした服装。ついたあだ名がそのものそのまま『完全無欠』。

「暮菱さん、最近笛代さんと仲がよろしくないようですが、喧嘩でもなさつたのですか?」

「別に、そういうわけじゃないよ。ただ、なんとなく。……うーん。なんというか、休憩期間、なのかな」「休憩期間、といいますと?」

「うん。ちょっと涼風と近づきすぎたかなつて」「ふふ、お付き合いでなさつてているのですか?」

「お付き合いで?」「誰と誰が。」

「いえ、暮菱さんと笠代さんが。

少なくとも、クラスの半分以上はそう思っていますけど」
そんな認識だったのか。クラスの人間からそんな田で見られてい
ただなんて。なんとなく夏の一件を思い出してしまつ。しかも一十
人近くか。

僕、男なんだけどな。

キーンゴーンカーンゴーン。

授業開始の合図とともに、先生が教室に入ってきた。

いえ、そういうことではないと思いますが……、とかなんとか委
員長が呟いているのが、チャイムに交じつて聞こえた。

放課後。外に出ると、もう一、二、三つ校舎が建てられそうなほど遠
くにある校門の前に、雪比等さんゆきひわがいた。

柊雪比等さん。狐耳に、長身。いつものよつこ、髪髪を後ろでく
くり、全身を白い服で統一している。

はあ。この人が来るから涼風に嫌われるのに。

「なんでいるんですか」

「寒かつたし、迎えに来てやつたんやけど?」

「余計なお世話です。車とか乗つてきていんじょ?」

「葛葉、最近、一人で帰つてくるから」

「三割はあなたのせいだよ。」

「……それも、余計なお世話です」

「余計なお世話で。あんまり仲間外れにせんといでな。……心配、
してるんやで?」

見上げると、雪比等さんは、心底氣遣つよつた、寂しそうな田で
こちらを見ていた。

別に僕にそんな趣味はないけれど、綺麗だ、と思つてしまつ。

たとえ嘘でも。化かされないとわかつていても。

思いがけず、思つてしまつ。

狡いよな、こういうのつて。

断れなく、なるじやないか。

「……わかりましたよ、仕方ありませんね。煙草吸いたいんで、さつさと帰りましょう」

「お、ええの？」

瞬時に表情をぱっと輝かせる。やつぱっこの人は嘘つきだ。狡い。「どうせ道は同じですし」

といふか、家が同じである。

正確には、僕が雪比等さんの家に転がり込んでいる形だ。家事とかは雪比等さんがやつてくれるのありがたいけど、当然ながら涼風は快く思つていない。

ちなみに、僕が学校に行つている間に雪比等さんが何をしているかを、僕は知らない。雪比等さんはまだ高校に行つているはずの年齢だから、親御さんから仕送りをしてもらつて学校に行つてるのかもしれないし、なにがしかの仕事をして自活しているのかもしけない。

ただ一つ言えることは、僕が家を出るまではまだ家にいて、僕が家に帰るときにはもう家にこる、ということだ。

家。

そういうえば涼風を家に迎えたことがないな。家に遊びに行つたこともなかつた。

涼風のこと、あんまりわかつてなかつたんだな、僕つて。

「……ずは

今更だけど、なんで雪比等さんと一緒に帰つてしまつたのだろう。余計嫌われるじゃないか。

「葛葉」

ああもう後先考えない自分がほとほと嫌になる。

「く、ず、は。起きてる？」

「な、なんですか雪比等さん。いきなり大声なんか出して
「いきなりと違うわもう。家着いたで。

あのな、葛葉。そないに涼風君が心配なら、会つてくれればええや
ん」

「べ、別に、あんな奴、心配でも何でもありませんよ」

それに、簡単に会つて謝れるならこんなに苦労してないよ。

「葛葉つてそういうのでもええとこだけ強情言つか、意地つ張り、
言つか」

「だからそんなんじゃないですって」

なんかみんな、今回やけに絡んでくるな。

実際心配しているわけではないだろ」。

それよりも煙草煙草。

僕は部屋に駆け込んだ。

そんなこんなで仲直りができないまま、数日が過ぎた。

学校では十一月半ばに控えた文化祭への準備が進んでいる。妙な
熱気が校内を包み始め、張り切る女子とだらける男子の対立が激し
くなっている。

うちのクラスは時期に合わせて『ハロウィーン喫茶』をやること
に決まった。その名の通り、お化けやら何やらのコスチュームを着
て喫茶店をやるわけだ。

ちなみに、当然僕は裏方志望。もう変な格好なんてしたくない。

放課後。

三々五々、いくつかのグループに分かれ、女子を中心に衣装の話
が進んでいる。

委員長は吸血鬼の伝統をドラクル伯爵の時代から解説し始め、何
やら持論を展開しているようだ。聞いてる女子達が若干引き気味で

ある。

どうでもいいことだけれど、教室の端で一部の女子が『魔女』といつよりも、いっそ『魔法少女』と呼んだほうがよさそうな奇抜な意匠の衣装を広げて話を盛り上げているのだが、あれは誰が着るのだろうか。まあどうせ僕には関係のない話なんだけど。

涼風は何をしているのだろう。教室をぐるりと一周見回してみるが、見当たらない。

念のためもう一回探してみる。やつぱり見つからない。
帰ってしまったのだろうか。たしか朝はいたはずだ。涼風がサボりなんて、珍しいな。

あつ、と声が上がったのは、その時だつた。

その方向を見ると、一人の女子生徒が困惑した表情で一枚の紙切れを握っていた。

眼鏡を掛けているから、視力には自信がある僕。

『酸素』

ボロボロの紙切れには、そう記されていた。

酸素。

元素記号O。

原子番号八。

原子量十六・〇〇。

酸素分子は、常温では気体で存在。
空気の五分の一を占めている。

今すぐに思いつくのはこのくらい。

授業で留つてからまだ半年しか経つてないから、間違つてはいな
いだう。

所詮、高校一年生の頭ではそれ以上はわからないけど。

教室内からは、他にも同じような紙切れが見つかった。

『酸素』の他に、『硫黄』『珪素』『砒素』『アルゴン』の、計五
枚。

どれもボロボロで、アルゴンなんかは紙が真ん中から真つ一につになつていた。

『砒素』は物騒だが、それぞれの元素に共通点はなさそうだ。発見された場所も、書類の中とか、椅子の下とか、ばらばらだし。

まあ、一番有り得るのは、カンニングペーパーだろう。

元素周期表のテストをしたときに使用して、処分に困つて教室内にばら撒いた、と考えるのが自然だ。このままなら、それで問題は解決されるだろう。

でも。どうもそれは考えにくい。

一つ。紙には元素名しか書かれていなかつた。元素記号や原子番号が一緒に書かれているならわかるけど、これでは使いづらくて仕方がない。

二つ。紙の文字は複数人で書かれていた。紙が傷んでいたので読み取るのに苦労したが、筆跡がそれぞれ違つていた。カンニングペーパーを大勢で作つたりしたら、見つかつたりしたときに全員が処分を受ける羽目になる。

三つ。そもそも周期表テストが行われたのは、半年近く前のことだ。今更になつて処分に困ることもないだろうし、もし困つたら家で捨てればいいのだ。わざわざ証拠品を配るような間抜けな真似をする奴が、一応エリート校を自称するこの学校（僕はお情けでお世話になつていいようなものだ）にいるはずがない。

しかし、カンペ説を否定してしまうと、他に代案もなくなつてしま

まつ。

家に帰つて考えてみるのも面白そつだ。

今日は雪比等さんが迎えに来なかつたので、じつへりと考へながら帰り道を歩いた。

家の玄関をがちゃりと開けると、雪比等さんは何やら料理をしていた。美味しいそうな匂いが胃を刺激してくれる。

意外と料理上手な雪比等さん。

「お、葛葉お帰りー」

「雪比等さん」

「葛葉、お帰り一言づたらただいまやろ？ で、なんや？」

僕は、紙切れのこと、元素のこと、カンペではないだらうとこうことを話してみた。

「どう思つますか、雪比等さん」

「まあカンニングやないなら、暗号やひな
暗号？」

「たとえば、クラスのA君がB君に想いを伝えたたいとするやひ。でも他の人にバレたら恥ずかしい。せやから暗号で想いを伝えよひ、とか。ロマンチックやなー」

「雪比等さん、それだとAもBも男子です。

それに、誰がそんな回りくどい方法で告白するんですか？」

「せやから『たとえば』やて。伝えるのは愛やなくて、部活のチーム編成でも、学園祭のクラス企画でも、なんでもええやん」

うちの学校、チーム編成は監督一人で決めるし、クラス企画もみんなの戸惑い様から違つことがわかる。

でも、暗号か。

暗号なら、解き方があるはずだ。

ますます楽しくなつてきた。

お風呂に入つて、ベッドの上に仰向けに転がる。

煙草はその辺に放り投げた。
深呼吸をして、目を閉じる。
時計の音が大きく聴こえる。
頭の中で、情報を整理する。

酸素。

硫黄。

珪素。

砒素。

アルゴン。

破れた紙。

元素名。

筆跡。

「解わかつた。大体、だけど」

僕はそのまま眠りについた。

翌日。

十月も、もう最終日だ。

放課後に、僕は意を決して一人の人間を呼び出した。
場所は、三階の空き教室。

三階は人通りも少なく、ここなら見られる心配もないだろう。
しばらく待つていると、教室の扉が開いた。

「トリックオアトリート、とか言えればいいのか？」

入ってきた人物、即ち僕が呼び出した人物は、笹代涼風。

「で、何の用だよ

「ちょっと面白い話があつたら」

「お前の『面白話』が面白かったためしがないだろ」

あハ。

「そんなこと言つたら夏祭のときの涼風の『面白とも』だつて……」

「じゃあここよ。待つて。明日まで滅茶苦茶面白ともん探ししてきてやるから」

……そんな話をしに呼び出したんじゃなくて。

「結局なんだよ、面白い話つて」

「いやや、昨日涼風が帰った後の話、聞いてる?」

「一応委員長から」

そんなことまでしてたのか、委員長。

完全無欠、恐るべし。

まあ、あの委員長はクラス内のトラブルとか放つておけない性質だからな。

「それで、お前は『謎解き』でもしたのか?」

「まあ、そういうこと」

「別に聞かなくともいい」

「まあさ、暗号なんだよね、あれ」

「聞けよ」

「いいじやん別に、減るもんじゃないし」

「時間が減るぜ?」

「その時は光の速さで走ればいいよ。

あの暗号、元素記号に変換して、並べればよかつたんだよ」

「……わかつた、聞いてやるよ」

「変換すると、『O』『S』『S-T』『A』『A』。『A』。

でもさ、このまま並べ替えても答えが出ないんだよね。だからさ、同じでひねりが必要になるんだよ。

問題は『アルゴン』の遭遇。

『アルゴン』だけ紙が真つ一つになつてたのは委員長に聞いた?』

「まあ、それも一応は」

さすが委員長。

「あれは、『アルゴン』を『A』と『R』に分割するつてことなんだ。だ。

それで、改めて『O』『S』『Si』『As』『A』『R』を並べ替えてみると、

『S』『As』『A』『Si』『R』『O』
『S A S A S i R O』で、笠代涼風を表すわけだ

「ほう。

で、その暗号は誰が、何のために?』

「それがわかんなかつたんだよ。

だから、昨日頑張つて考えてみた。

あつさり言えれば、委員長が、僕のために

「委員長?」

「うん。僕と涼風の仲が悪いつて知つて、委員長がやつたつてこと。僕がこいつの問題があれば解こうとするの、あの委員長なら知つてるだろ?」、委員長が犯人だとすると、涼風に昨日のことを教えたのも説明がつくし

「でも、ちょっと待て。今の問題、結構阿呆臭いぞ? あの委員長が、そんな完成度低いパズル作るか?」

「それも考えた。

多分、クラスの一部に頼んだんだと思う
みんなで作ったから、筆跡も違うわけだ。

「それに、複数人いれば、紙を隠すのも楽だし
「なるほどな。

それで、なんで俺を呼んだ?

それ、わざわざ俺に言つ必要ねーよな

む! やつぱり言わなきやだめだよな。

「…………えーっとね。

「」の前の「」と、謝りつかと思つて。

春から涼風に迷惑ばっかりかけてさ。
それで、喧嘩までして。

「」

「葛葉、そこ動くな

殴られる。

そう思つた。

涼風が近づいてくる。

涼風

距離

近く

交錯

瞬間

頬に。

「ちゅ」

。

。

？

暖かく、僅かに湿つた感触。

「えーっと。

トリックオアトリートって言つたけどお菓子くれなかつたから悪戯しました、とか言わないよね?」

「」

返事がない。

まったく、悪い冗談だ。恥ずかしいならしなきやいいの?。

「じゃあ、帰るよ、涼風」

「あ、ああ
「明日から、いつも通り一緒に学校来ようか」
「そ、そうだな
「一人だと、結構寒いんだよ?」
「自業自得だろ」

別にそんな趣味はないけど。
やっぱり僕にそんな趣味はないけど。

……ちょっとだけ、嬉しかったり。

Trust ≪ is Happy END .

≈ Trick or

(後書き)

『白鳥色の飴玉』いかがでしたか。
感想頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7006p/>

白鳥色の飴玉

2011年5月29日18時40分発行